

# 宗教的方面より見たる臺灣の 民族性

臺灣總督府前社寺  
課長 文學士

丸 井 圭 治 郎

臺灣は千二三年前隋唐の時代から琉球の名で支那に知られてゐたが、盛んに支那人の移住を見たのは約二百五十年前清朝の領土となつてからである。其の移住民の多くは對岸廈門の附近なる泉州及漳州から渡つて來た福建人即ち古への閩族で、其の他は廣東人即ち古への粵族であるが、其の福建人は主に平地に住居し、廣東人は平地と山との間即ち臺灣人が山脚と呼ぶ山麓の地に家を構へてゐる。これ等が年と共に益々渡來移住の數を増して形づくつたのが今日の所謂臺灣人で、隨つて臺灣人の風俗、習慣、性情、言語等は皆南方支那のそれである。

臺灣に長く在住して臺灣人の風習、性情等を研究した檢察官の上内氏は、彼等の特性として悖徳性、迷信性、貪利性、慘虐性、復讐性、詐欺性、爭鬪性、叛逆性等の諸惡性を列舉してゐるが、是等は要す

るに南方支那の漢族に通有な性質たる功利主義、利己主義、唯物主義の現れであつて、其根柢の思想は概ね道教から來てゐるのである。

世間では一般に支那を以て儒教國であるとしてゐるが、それは觀察の誤りであつて、支那本土の人間は勿論、其の傳統を受けた臺灣人も亦道教民族である。これは彼等の風習を見れば、何人にも直ぐに會得される事で、今日臺灣に在住する約三百九十萬人中、十八萬の内出人、約十萬の生蕃人、三萬の外國人を除いた殘餘の約三百六十萬人の六分の五までは大抵道教徒であるを見て宜しい。然し臺灣では支那と同じく、佛教徒と云つても純正の佛教徒ではなく、六分の佛教に、二三分の道教、一二分の儒教を含んでゐるのと同様に、道教の中にも多少の儒佛思想を混在してゐるとは争はれない事實である。臺灣では一部のには儒教、佛教を信奉する人は少なくない。殊に儒教は臺灣で之を奉じてゐると見られる者が可なり多數であつて、四書、五經の素讀を教へる書房即ち寺小屋の數も相當にあるが、然しそれらは決して道德の書として教へられるのではなく、文學の書として教へられてゐるのである。即ち彼等は只他日詩文を作るに必要な書物として經典を學習するのであつて、聖人の道として之を研究し、實踐躬行せんが爲めにするものではないのである。だから思想的には何處迄も儒教徒とは云へない。一面彼等が儒教徒を標榜するのは、今日の道教が頗る墮落して、其の宣傳者たる道士の輩は、何れも苦力同様の有様

であるから、其の仲間と云はれるとを耻ぢ避けて、歴代の朝廷からも優遇され、一般人にも尊敬される儒教の蔭に隠れんとする爲である。さり乍ら儒教の生命は今日既に支那では實質的に亡びてゐるのであつて、優遇も尊敬も要するに形式に過ぎない。

佛教も矢張之と同様であつて、今日でも、臺灣には佛教僧の居る寺院が相應にあるが、しかし純正な佛教徒は臺灣には多く居ないと云つて宜しい。一体臺灣といはず支那の佛教は六朝の終りに三教歸一の叫びがあげられてから此の方、漸次道教に蠶食され、今日では殆んど之に征服された形に成つてしまつてゐるのであつて、大抵の寺には必ず道教の神が併せ祀られ、僧侶は皆道教の神を拜んでゐる。だから一般の佛教信者と雖も、矢張り道教の神を拜んでゐるのであつて、要するに佛教、儒教共に道教の敵としての勢力を持つてゐないのである。

## 二

右の如く臺灣に大勢力のある道教とは、如何なる宗教であるかといふに、古くは老子に初まり、張道陵とか、葛洪、下つては寇謙之等によつて完成された一種の現世教であるが、今日では老子の道德經とは殆ど何等の關係もなく、支那民族固有の原始的宗教思想を經とし、之に老莊の清靜無爲の哲理と、魏伯陽葛洪の神仙術と、張道陵寇謙之の符呪、其他の迷信を加へ、更に佛教の思想及び儀式を取込んで作

り上げた極めて雑然たるものである。だからその教へや儀式の中には、練丹術と稱する一種の仙薬法があつて、其の薬を飲めば藥味の等級に従ひ、上薬ならば天仙となつて羽化登仙し、中薬ならば地仙となつて長壽を得、下薬ならば尸解仙となつて疾なく、思ひのまゝに幸福を受けるとが出来るといつたやうな事もあれば、又守り札、神水の類を與へる類の行事もあり、通俗な道德説も交へて説かれてゐる。

これは彼等が老子を宗とすると稱するにも拘らず純然たる老子の主義とは大いに徑庭の存する所以であつて、老子は道德を説かず、殊に家族主義を基礎に置いての道德訓に至つては決して之を説いて居ないが今日の道教では立派にそれを説いてゐる。太上感應編といふのは道教の代表的經典とせられるもので、大抵の家には必ず其の一本が藏されてゐるが、極めて分りやすく、又彼等の氣に入るやうに書かれてゐて、それには家族についての道德が盛んに説いてある外に、儒教の教義や佛教の教義が色々織込まれてゐる。

佛教の教義の取込まれた著しい例としては、輪廻説、因果説、地獄極樂説等が算へられる。支那人元來の思想には來世の信仰はないのであるが、道教には來世に十箇の國の存在を假想して、人間は死後すべてそれ等の國々を順次に經廻り、最後に十善王廳の淨玻璃の鏡に照らされて、或は王公將相に、或は

下凡の境涯に、或は犬猫蟲等の畜生に、それぞれ生れ更らせられるといふ事を玉歷抄といふ本に説いてゐる。

其の外又道教では、單に佛教を思想的に取入れたばかりでなく、佛教の佛菩薩を其の儘に自分のものとしてゐる。例へば觀音菩薩が其の一つで、臺北の近くにある觀音山の山上には凌雲禪寺といふ寺があつて、そこには觀音が安置されてゐるが、別に又其の山麓に凌雲寺があつて、こゝにも觀音がまつられてゐる。上の方の寺には二十人ばかりの僧侶が常住してゐて、法衣を着し、肉食妻帯を禁じて、嚴重に戒律を守つてゐる点は寧ろ日本の僧侶以上であるが、下の方のは寺でなく所謂廟で、平生は別に堂守もなく、祭の時に附近の者が集まつて來て、廟前で犠牲の豚を殺し、其の毛をむしり取つて一定の型の枠の上に載せ、之を觀音に供へて祭をするのである。この犠牲の豚は百、二百、所によつては二千疋にも上ることがあつて、之が爲めに廟前は血腥い程である。豚の外には、山羊、鶏、家鴨も犠牲として殺される。なせ佛たる觀音の前で、こんな事をするのかといふと、それは道教の神としての觀音であるからで名前も特に觀音媽（クワンニンマ）と唱へ、姿こそ蓮臺の上に座してゐる普通の觀音の木像であるが、之に對する臺灣人の腦裡には、觀音佛ではなく、觀音媽といふ一種の道教神として映じてゐるのである。

斯ういふ風に道教では、他教の神佛を取入れて自家藥籠中の物とするばかりでなく、自家の神にも佛教的又は佛教的名稱を附して居るのであつて、關羽には儒教神としては文衡聖帝、佛としては蓋天古佛、道教神としては帝君爺、協天大帝、伏魔大帝の名が與へられ、又呂洞賓に對しては儒教神としては孚佑帝君、純陽夫子、佛としては文尼眞佛、道教神としては呂仙祖、妙道天尊の名が與へられて居るのである。殊に甚だしきは耶蘇、パウロ、マホメットのやうな人物迄も道教の神仙として神仙通鑑に載せられてゐる。現に私は臺灣の東海岸にある花蓮港地方で、百姓が田の畦に、耶蘇と書いた紙を竹に挟んで立て、虫除の咒符にしてゐるのを見たが、こんな風に耶蘇でも何でも自分の方の神にして之に現世的の祈禱をすれば利益を示して呉れるものと思つてゐるのが、道教徒の一般性である。だから基督教徒に成つてゐるものでも、果して眞に耶蘇を知つてゐる者があるかどうか疑はしいもので、多くは玉皇上帝を通じて天主教の神を拜み、媽祖を通じてマリヤを拜んでゐるやうである。序でに鳥渡お斷りをして置くが漢族でない熟蕃人の中には、純正なる耶蘇教信者を見出す事が出来るのである。

要するに彼等臺灣人は、如何なる宗教に對しても無抵抗的であるが、其の信仰の中樞をなすものは現世信仰で、財と、子と、壽との三つが祈禱の目的である。即ち金を澤山持つて、子孫を多く儲け、そして長生するのが彼等の唯一の希望である。だから、日本内地からも随分色々の宗派が傳道に入つて居る

が、佛教僧などがいくら高遠な理論を説いて聞かせても俚耳には入らないで、天理教や金光教などが歡迎されてゐる。これは天理教などの宣傳者が、病人を捕へてその前で祈禱を行ひ、神水を飲ませるといふ手段が、彼等の要求にびつたりと合つてゐるが爲であつて、若し其の結果偶々病氣の治癒するやうな事でもあれば、彼等は一も二もなく其の信者になるのである。これは天理教や金光教ばかりでなく、何者でも或る靈妙な力を現實に現はしさへすれば、彼等はそれを道教での最も偉大な神である玉皇上帝から封冊を受けて神格を興へられた證據として崇拜するのであつて、苟くも彼等の欲求する財子壽に對して有力なる效驗を示したといふ評判が立てば、彼等は道の遠きをも厭はずして雲集禮拜するのである。

財子壽に對するこの熾烈なる欲求祈禱は、家族制度から來てゐるのであらうが、これに付いて面白いのは、臺灣は勿論南支至る所で祭られてゐる有應公といふものである。イウエンコンといふのが其の支那讀で、三四尺四方位の小さな祠堂の前に有<sub>レ</sub>求必應と題した額が掲げられてゐる。これも子孫の富貴を希ふ爲のもので、堂の中には其の祈願を達成して貰ひたさに、方々から拾ひ集めて來た無縁者の白骨が無數に納められてゐる。親の功德が子に報いて、子孫が富貴長命を得るといふのである。

### 三

右に述べたやうに彼等の信仰は、どこまでも現世的で、來世的の分子は極めて少いが、此の現世信仰

の思想と佛教思想とが混和されて巧みに現はされてゐるものは道教の功過格である。思想的には無價値なものであるが、彼等が尊重する生命の上に因果應報の理をあてはめ、功利主義の彼等にも理解されるやうに説いてあるのが中々面白いのである。

これは善行と悪業との結果を各數字で現はして計算したもので、先づ原則として、斯々の行爲は一點の功に値し斯々の行爲は、マイナス一點即ち過に當るといふとを定め、功が積んで千に至れば幸福が來り、病氣も治癒するが、反對に過が重なつて千に達すれば壽命を奪はれるとするのである。所がこの功過の各採点が合理的に出來て居れば可いが、甲の功過と乙の功過との關係などは全然考慮の外に置いて定められてゐるため、度々不都合な結果を見るのである。例へば文字を書いた紙を其の儘で捨てるとマイナス一に相當するが、丁寧に扱つて焼くとプラス三に成る。然るに他方で又、他人の所有物を窃取した者はマイナス一である。そこで字を書いた紙を拾つて丁寧に焼き捨てれば、差引三回泥棒をしても可いことになるのである。其の外、人の妻を犯した者はマイナス百、尼を犯した者は三百、殺人者はマイナス百である。

これらの例を見ても功過格なるものが、如何に不合理且つ非論理的なものであるかゞ分る事と思ふが臺灣人などにはこれが傳統的に重んぜられてゐて、正月など内地人は泥酔して道路を歩いてゐても、酒



に酔つて表に出てゐる臺灣人の姿は決して見られない。これは功過格に、飲酒乱に及ぶものは三過とあつて、マイナス三點となるからである。

斯の如く道教は臺灣人の信仰を支配する大勢力を持つてゐるが、此の道教には南北の二派がある。北派の本山は北京にあつて全真教と呼び、謂はゞ自力主義の方で、魏伯陽、葛洪の流れに屬してゐる。之に對する南派の方は、命を主とする他力主義の方で、符呪科教によつて壽福を求めるとを目的とし、隨つて非常に迷信的である。然し何れにしても一体に道教其のものが迷信的で、立派な人格を持つた祖師と見るべきものもなく、例へば其の宗とする所の老子にしても、又、呂洞賓にしても、其の行履がすべて神仙的、超人的で、人間的、道德的の行ひは少しも説かれてゐない。だから教徒の信仰は退嬰的、宿命的で、根據ある力を欠いてゐる。斯の如き信仰生活を殆ど全部の臺灣人が送つてゐるといふとは、最も注意すべき事實で、之を其の儘に委して置いたのでは、過去何千年の傳統を持つてゐる彼等の迷信はいよ／＼根強さを加へ、遂には如何なる力を以てしても拔去ることが出来なくなると思ふ。殊に又道教は解釋の仕方によつては非常に危険な思想を含んでゐるもので、列子の如きは、天下の爲にならば毛一本抜くともしないと公言してゐるが、之を若し、天下國家社會の爲になるとは決してやらないと云ふ意味だとすれば、斯の如き思想を土臺にしてゐるものが、やがて極端な社會主義に奔るのは當然である。功

過格は個人道徳又は家族道徳を説いてゐるけれども、國家道徳又は社會道徳に就ては一言も説いて居らぬ。道教では孝を説くも未だ嘗て忠を説かぬ。

我國へも曾て一たびこの道教が入つて來たが、支那とは反對に佛教の爲に敗られて、僅に只眞言、天台二宗の修驗道に其の痕を留めたに過ぎない。それなればこそ我が民族固有の日本魂は、少しも傷はれらなくして今日に至つたのであつて、道教の勢力が盛んな爲に、功利的、物質的の國民となつた支那の現状と好個の對照をなすものである。故に支那の傳統を受けてゐる臺灣人を同化せんとするに當つては、幸に今日の道教は佛教を幾分取入れてゐるのであるから、日本佛教の力を以て導くやうにしたならば、必ず効果があるであらうと思ふ。又斯くして其の効果を擧ぐるでなければ、徹底的に日本國の爲めに、同時に臺灣の爲めに其の福利を増進するとは出來ないと思ふ。

一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事に候也

日

蓮